

「履物を脱ぐ」

(ルカによる福音書 13:1-9)

今日の旧約聖書で、燃える芝の間からモーセに語りかけた神は、「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。」と言われました。「履物を脱ぐ」とは、所有権の放棄を表します。神の声に応え、自らの所有を手放し、モーセは神のみ心に従って歩むこととなります。このモーセに、「わたしはある」と言われる神が常に伴い、民は乳と蜜の流れる地に導かれます。

わたしたちも、自らの所有を守ることに固執しては、神の呼びかけが聞こえなくなってしまいます。たとえば、教会の建物を守ることに固執して、神の声を無視しては何の意味もありません。また、所有とは、土地やお金など、目に見えるものだけではありません。それは、神の呼びかけを無にし、他者の痛みを目を塞がせるあらゆるものです。大齋節は、神と他者の声を遠ざけている自らにとっての所有とは何かを見つめるときでもあります。神からの声に耳を澄まし、神からの使命を受け、所有を手放して神に自らを明け渡して従う先に、今握りしめているものを遥かに超えた恵みが用意されています。

今日の福音書の「いちじくのたとえ」では、主人は三年間も待ったにもかかわらず、実をつけなかった木を「切り倒せ」と園丁に命じます。しかし、園丁は「今年もこのままにしてください。面倒を見て、来年には実がなるかもしれませんから」と願います。このたとえを、主人が神で、園丁をイエスと読むこともありますが、むしろこの主人と園丁のやり取りには、神の葛藤が表されているように感じます。神は、神の呼びかけを無視し、実りをもたらさない人間を裁くことの方が当然でありながら、一方では、あと一年、あと一年と待ち続けてくださるのです。ペトロの手紙Ⅱには、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」とあります。神が一年忍耐するということは、人の想像を絶するほど忍耐してくださることなのです。そしてその間も「木の周りを掘って、肥やし」をやるように、神はわたしたちのことを養い、導き続けてくださるのです。これが「わたしはある」と言われる神の有り様です。モーセはこの神に自らを明け渡しました。わたしたちも、与えられた「一年」をどう過ごすのが求められています。